

東京都現代美術館 春のワークショップ 2014  
記録集

みえる人とみえない人の

# 「井戸端鑑賞」

オリジナル音声ガイドをつくろう！



東京都現代美術館 春のワークショップ 2014 記録集

## みえる人とみえない人の 「井戸端鑑賞」

—オリジナル音声ガイドをつくろう！

まるで“井戸端会議”をするように気軽に、  
作品を囲んで語り合う「井戸端鑑賞」。  
春のワークショップ 2014 では、目のみえる人と  
みえない人がこの鑑賞を体験しました。  
さらに、語り合った音声を素材に、“他人の見方を  
知ることができるツール”となる「オリジナル音声  
ガイド」を参加者自ら編集・制作しました。

### ワークショップの流れ

- 10:30 地下鉄「清澄白河」駅集合  
チームごとに歩いて美術館へ
- 11:00 美術館到着。ガイダンス
- 11:30 MOT コレクション（常設展）で  
「井戸端鑑賞」を体験
- 12:45 昼休憩
- 13:30 「オリジナル音声ガイド」の編集
- 16:00 完成した音声ガイドの発表
- 16:30 ワークショップ終了

実施日：2014年3月1日（土）、2日（日）  
《同一内容で2回開催》

参加者：3月1日22名（うち介助者2名）、  
3月2日18名



## 「井戸端鑑賞」のやり方



井戸端会議+美術鑑賞=「井戸端鑑賞」！  
みえる人、みえない人、いろいろな人が集まって  
会話しながら鑑賞する、美術の楽しみ方として  
名付けました。

### ●みえる人もみえない人も一緒に

今回のワークショップでは、約8人ずつ（うち、視覚に障害のある方1～2名、晴眼者6～7名）、3つのチームで展示室を巡りました。

各チームにはナビゲーター（視覚に障害のあるスタッフ）1名と、サポートスタッフ（晴眼者のスタッフ）1名が同行して、鑑賞時の会話を促しました。



参加者の中には、聴覚に障害のある人も。手話通訳と要約筆記を介して、会話を行いました。

### ●作品を囲んで、気軽に言葉を交わしながら作品を鑑賞します

みえる人とみえない人が、作品の前で言葉を交わすことで、互いの見方や感じ方を伝えます。あまり難しい言葉は必要ありません。たとえば、誰かと町を歩いていて、面白いものを見かけた時、自然と会話が弾むように、作品鑑賞も、普段遣いの言葉で大丈夫。気になる作品の前で足を止め、語り合えば、「井戸端鑑賞」は誰にでも実践できます。



駅から美術館に向かう途中にも面白いものが！

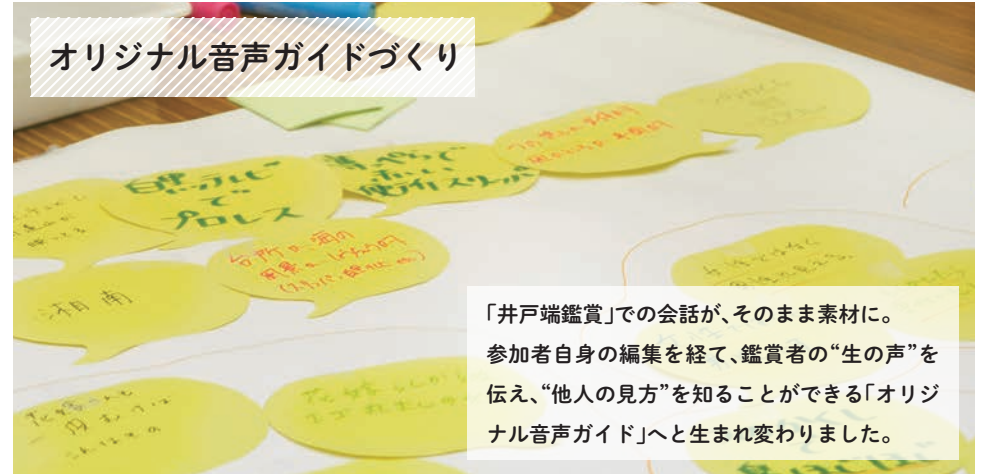
### ●会話のコツは、「見えるもの」と「見えないもの」

作品のサイズや形状、描かれた内容などの「見えるもの」。そして、作品の印象や、見ながら考えたこと、連想したことなどの「見えないもの」。この二つを、みえる人もみえない人も共に言葉にしていくことで、「井戸端鑑賞」は、より一層、充実したものになっていきます。参加者の皆さんも、互いの言葉を紡いで、新たな作品の魅力を発見していきました。



みんなが集まれば会話も弾む！

## オリジナル音声ガイドづくり



「井戸端鑑賞」での会話が、そのまま素材に。  
参加者自身の編集を経て、鑑賞者の“生の声”を  
伝え、“他人の見方”を知ることができる「オリジ  
ナル音声ガイド」へと生まれ変わりました。

### ●編集のプロセス



#### ①鑑賞を振り返る

まずは、記憶をたどる話し合い。印象的なトピックや発言を思い出します。誰に向け、何を伝える音声ガイドにするか、編集方針についても話し合います。



#### ②構成を考える

意見を、吹き出しカードに書き出します。トピックをまとめ、大まかな構成を考えます。



#### ③音の切り出し・記憶の拾い上げ

PCソフトで音声聞いて、音の切り出し。約6分の内容への編集を目指します。作業は、オペレーターが補助します。ここでは、記憶から漏れていた面白い発言も拾い上げます。

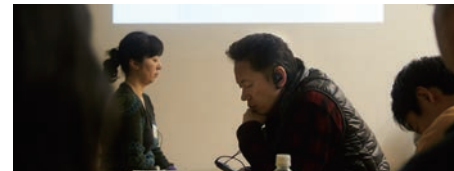


#### ④微調整

一度通して聞き、トピックの順番の入れ替えや、追加、削除などを行います。

①～④の手順を基本に、チームごとに独自の工夫も加えながら、編集作業を行いました。

### ●できあがったオリジナル音声ガイドを聞く



最後は、スタジオで発表会。スクリーンに投影された作品写真をじっと見つめながら聞く人、そっと目をふせて、頭の中に作品像を描きながら聞く人…。みえる人とみえない人が、ともに作りあげた、6種類のオリジナル音声ガイドが完成しました！

### ●ワークショップ後の展開について

完成したオリジナル音声ガイドは、ワークショップ後も、館内での記録展示※1をはじめ、美術館HPでの公開※2など、様々な方法で、活用の可能性を探っていきます。

※1 記録展示は館内ホワイエにて、2014年3月15日～30日に実施。なお、音声ガイド対象となった作品は、5月11日まで常設展示室にて展示されています。

※2 公開状況等の詳細は、美術館HPをご覧ください。

# Day 1 A チーム音声ガイド ダイジェスト

Aチームは、適度に説明を織り交ぜながらじっくりと音声ガイドを作りました。  
肩の力を抜いて交わした会話の中から、ゆっくりとゆっくりと、新たな作品の  
魅力が浮かび上がってくるかもしれません。



全体的に  
オレンジ色

オートメーション化  
された人形っぽい

オレンジ色は  
太陽や実りを  
思わせる

額は木で  
シンプル

ぶあーと広がる  
ような遠近感が  
ある

一瞬、足を上げて  
いる様子が  
パッと写っている

空というか  
背景が「畝」を  
表してる

広がりを感じなくて  
天井を感じる

横 3m くらい  
縦 1m 半~2m

部屋で一番  
大きな絵ですね

個性が排除  
されている

天井にドレープ幕を  
張ったよう

ビニールハウス  
みたいな感じ

タイトルは  
《田園》

「食う為に  
生きる為に耕す  
父母兄弟姉妹におくる  
1956」と書いてある

広い畑を、みんなで  
手を取り合って  
行進しているような  
イメージ

足で畑を耕して  
いるイメージ

屋根が覆われて  
圧迫感がある

離れたら  
印象変わる？

顔なしの集まり  
みたい…

感情もない、  
顔もない、  
服もない

ラインダンス  
みたいな

キャッチーだけど  
実は中にすごい  
メッセージがありそう

明るく前向きに  
歩こうとする  
力強さがある

個性が無くて  
不気味…

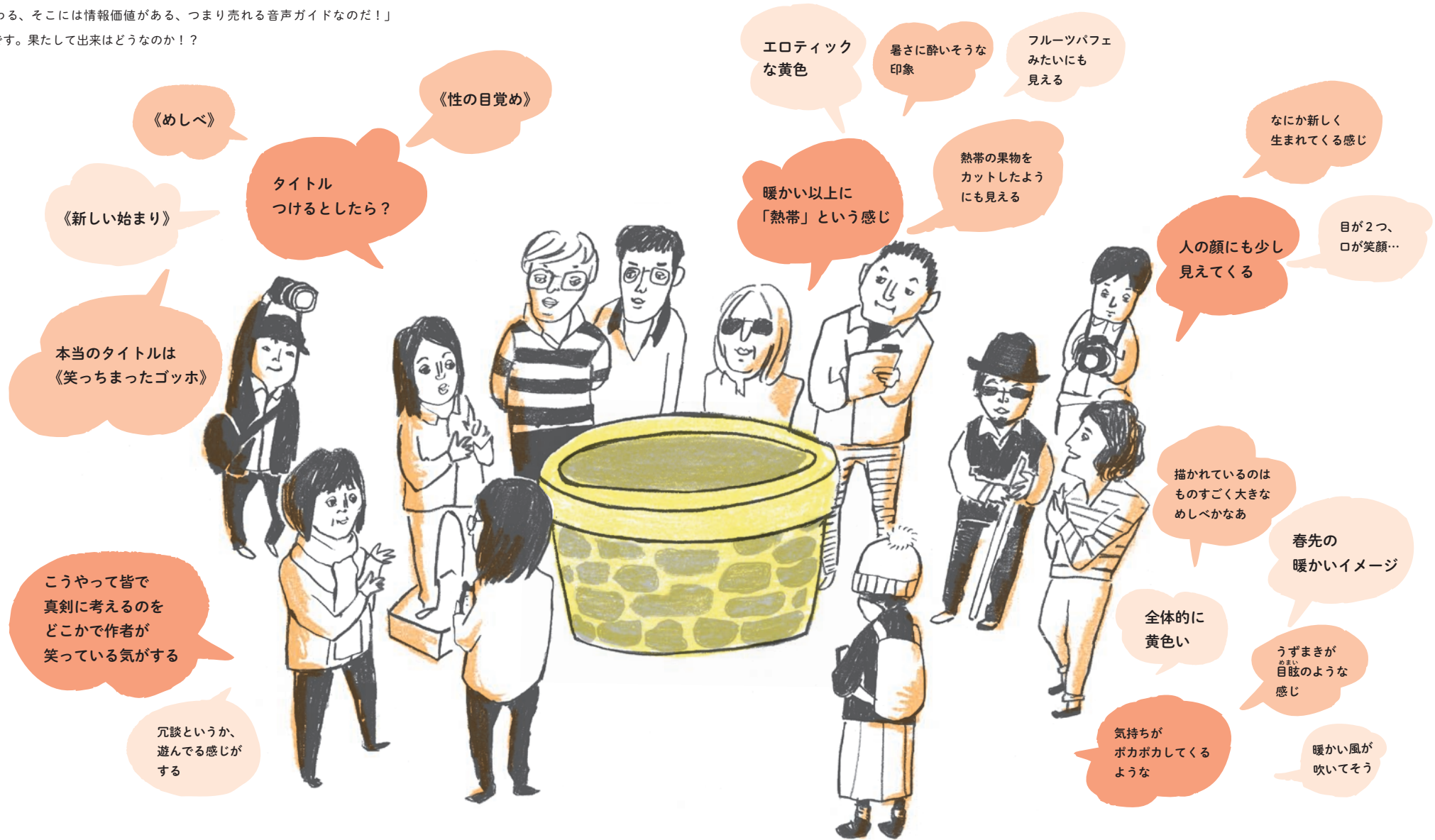
音だったら「ドっす、  
ドっす、ドっす」って  
行進しているような

「ザっザっザっ」って  
感じもする



## Day 1 B チーム音声ガイド ダイジェスト

個性派メンバーが集まったBチームは、編集作業での話し合いを経て「売れる音声ガイド」を目指して作りました。「誰かの意見を聞くことで自分の既存概念が変わる、そこには情報価値がある、つまり売れる音声ガイドなのだ！」だそうです。果たして出来はどうか!?



《めしべ》

《性の目覚め》

エロティックな黄色

暑さに酔いそうな印象

フルーツパフェみたいにも見える

《新しい始まり》

タイトルつけるとしたら?

暖かい以上に「熱帯」という感じ

熱帯の果物をカットしたようにも見える

なにか新しく生まれてくる感じ

目が2つ、口が笑顔...

本当のタイトルは《笑っちゃったゴッホ》

人の顔にも少し見えてくる

描かれているのはものすごく大きなめしべかなあ

春先の暖かいイメージ

こうやって皆で真剣に考えるのをどこかで作者が笑っている気がする

全体的に黄色い

うずまきがめまい目眩のような感じ

冗談というか、遊んでる感じがする

気持ちポカポカしてくるような

暖かい風が吹いてそう

## Day 1 C チーム音声ガイド ダイジェスト

Cチームが選んだ作品のモチーフは、誰にとっても身近なあるモノです。それについてひたすら語り尽くしていくうちに、思わぬ話題が飛び出すことも。自分達が感じた、会話が弾む楽しさをお裾分けしたいという思いで作った音声ガイドです。会話が転がっていく様子が伝わるでしょうか。



## Day 2 A チーム音声ガイド ダイジェスト

一見すると、暗く重苦しい雰囲気の作品を選んだ A チーム。最初は遠慮がちに話していましたが、作品の中に差す光が皆の目に止まったことをきっかけに、次第に絵の人物に感情移入する人も。一つの作品を巡って揺れ動く、鑑賞者の気持ちが音声ガイドにも現れました。





## Day 2 B チーム音声ガイド ダイジェスト

全てを語らない、「想像の余地を残す音声ガイド」があってもいいじゃないか！」というチャレンジ精神から作られた音声ガイドです。ガイドとして成立しているかどうかは分かりませんが、聴いた人が思わず「何だろう？」と引き込まれるような音声ガイドを目指しました。聴くときっと作品を見なくなる？



微妙に色が違うオレンジ

顔だけ顔に見えないような…

馬の蹄みたいな形のものがある

スプーンみたいなものもある

全面的に明るいレモン色

3m…  
2mくらい

でかいね！

引いてみると「親指」に見える！（笑）

指紋を抽象的にまとめちゃった感じ（笑）

どっち側の？

チェックや点々だったり…

左手！

親指の中の模様が「カテゴライズ」されてる（笑）

ウズマキ状のもの

ゴッホのタッチだ！

黒い点々が口のまわりに…  
ご飯粒がついてる感じ

ユーモアを感じる

なんか絵とピットリくる

《今日も元気でご飯がうまい》（笑）

題名は、《笑っちゃったゴッホ》

ということは、なんかパロディみたいな感じかな？

勝手にタイトルつけるとしたら？

ゴッホのひまわりの黄色

《親指くん》

《能天気なゴッホ》

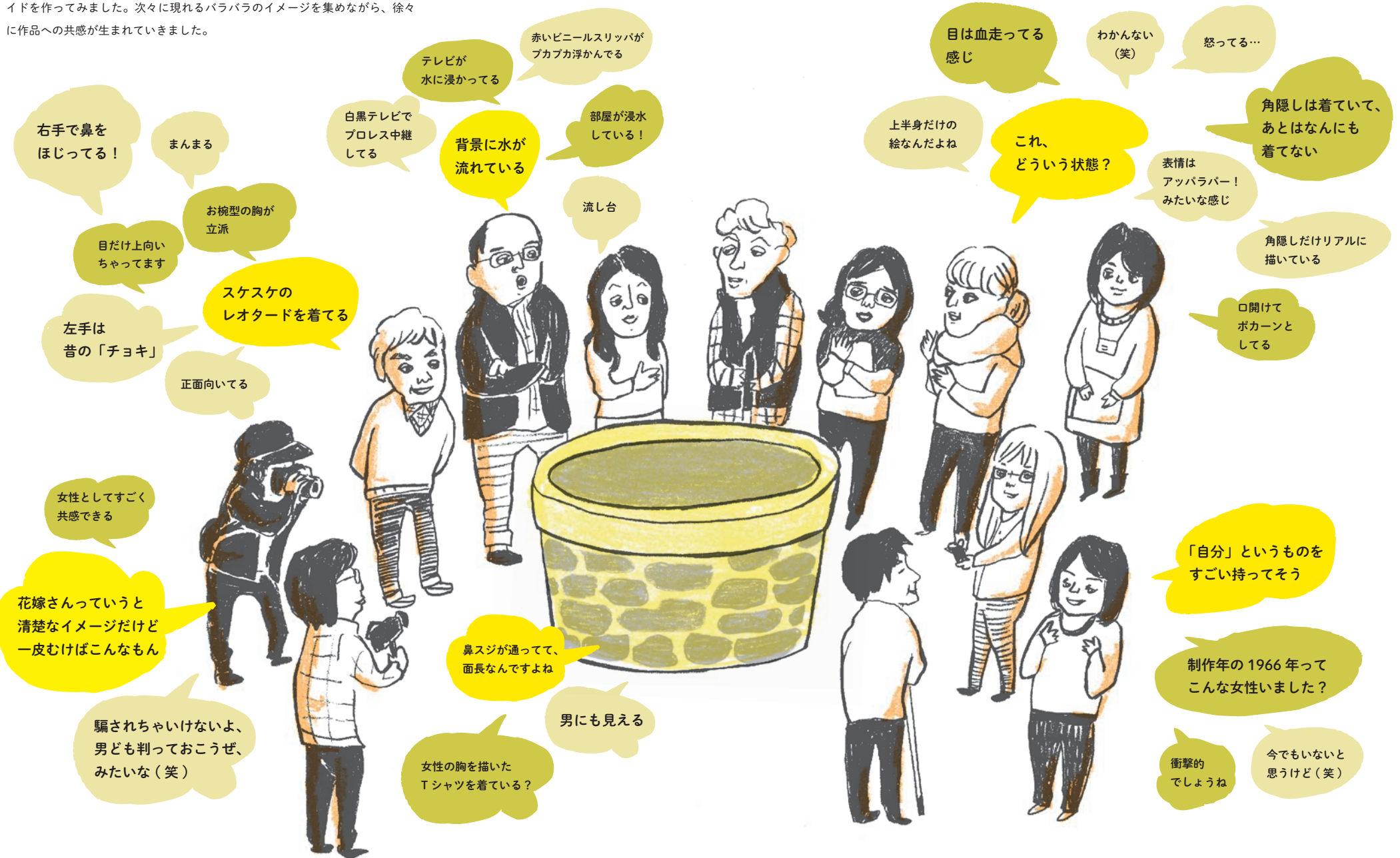
ゴッホだと能天気なんてあり得なさそうだから《アリエナイ》

ゴッホなのに悩みがなさそう



## Day 2 C チーム音声ガイド ダイジェスト

このチームでは、作品を見た時にちょっとした意外性が生まれるような音声ガイドを作ってみました。次々に現れるバラバラのイメージを集めながら、徐々に作品への共感が生まれていきました。





## 参加者の感想から

自然の流れを  
まとめると  
ストーリーが  
そこに生まれて  
いたことに感動した。



声に出して共有することで  
自分自身の考えに逆に気づ  
くことも多くあった。  
音声ガイドの  
副音声として  
使ったら面白いかも。



以前から知っている  
絵画作品でしたが、  
短時間でその印象が  
ここまで大きく  
変わるとは  
思いませんでした。



想像していた（よくある）  
音声ガイドンス作り  
ではなくてとても  
面白かったです。



作品の意図を伝えようと  
する作家も必死なんだと  
いう事が理解できた  
気がする。



音声ガイドの長さは  
5分くらいが  
聞きやすいの  
かな…?



見えない人と聞こえない人と  
混ざってどーなる？と  
思ったのですが、作品を楽  
しみたい、知りたい、語  
りたいという「思い」  
は誰でも同じ  
なのです。



聴覚に障害のある者として  
参加しましたが、聴覚、視  
覚の障害の区別もなくおお  
いに楽しめました（手話通  
訳、PC 要約筆記のおかげ）。  
オリジナル音声ガイドを編  
集するにあたって、皆で  
「アートを鑑賞することの  
楽しさ」を伝えようと一緒  
に考えていたことが  
大きな成果だと  
思っています。



とにかく、皆で言葉が  
出る出る！  
若者たちの  
言葉が新鮮で、  
新しい展開を生む。  
また次回に期待！



最後は  
作品の前で  
聴きたかった。



ポップな絵を見られて、  
マジメじゃない、  
アンチモラルな感じが  
よかった。  
作品のアウトライン  
（人物・風景）を  
最初に知りたい。



視覚障害者の方も一緒に  
作り上げた感が  
あって、良い  
音声ガイドが  
できたと思う。



自分では「当たり前」だと  
思っていた感想が  
個人的なものだと  
気づかされた。



美術作品が様々な  
人とすぐに  
交流するための  
ネタになるという事を  
改めて実感しました。



普段一人で  
見に来ていたら  
1分で通過した  
作品を、じっくり  
観ることができて  
面白かった。



当初はどうなるのかという  
ドキドキ感がありましたが、うまくいくもんなんで  
すね！（笑）  
次回やるとしたら、  
もう少し時間が  
あればいいなと  
思いました。



参加していない方が、  
このガイドを聞いて  
どのように  
感じるか  
知りたい。



多くの方とかなか共有  
できない美術の感想を  
この企画は簡単に  
飛び越え、おどろき  
嬉しく思いました。



視覚障がい者の  
感じることで  
共に作業する  
ことで、少しでも  
理解できたのが  
素晴らしいかったです。



「井戸端鑑賞」の  
ネーミングが  
よく合っていると  
感じました。



Day1 A チーム鑑賞作品  
鏗嘯《田園》



Day2 A チーム鑑賞作品  
鶴岡政男《重い手》



Day1 C チーム鑑賞作品  
三木富雄《EAR》



Day2 B チーム鑑賞作品  
岡本信治郎《笑っちゃったゴッホ》



Day1 B チーム鑑賞作品  
岡本信治郎《笑っちゃったゴッホ》



Day2 C チーム鑑賞作品  
横尾忠則《花嫁》



## みえる人とみえない人の「井戸端鑑賞」ーオリジナル音声ガイドをつくろう！に寄せて



### 言葉のスポットで作品像を描く

池尻 豪介  
東京都現代美術館 事業推進課  
教育普及係 学芸員・本企画担当

春のワークショップ 2014 は、鑑賞者の裾野を広げる取り組みとして、当館では初めての、目のみえる人とみえない人が共に楽しめる美術鑑賞をテーマに実施しました。

企画・指導の「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」の皆さんは、様々な美術館で、みえる人とみえない人が作品を前に語り合う鑑賞会を自主開催しているグループです。目のみえないスタッフがナビゲーターとして参加者を先導し、会話を促していくという手法に特徴があります。昨年からは当館にも何度か足を運んで下さり、受け入れを担当したこともあって、代表の林さん、そして鄭さんに企画を相談しました。皆さんには、障害の有無によらず楽しめるものにしたいという思いに共感いただき、企画づくりが始まりました。

林さん達からの提案は、視覚障害者のための音声ガイド制作。他に、鑑賞者の会話を記録して残してみたいという話もありました。この2つのアイデアが結び付き、鑑賞時の音声素材に、みえる人とみえない人の双方にとって役立つ、あるいは楽しめる「オリジナル音声ガイド」を編集するというプログラムになりました。

音声なら、みえる人もみえない人も一緒に聞きながら編集作業できる一方、参加者が技術面で煩わされることのないよう、音声編集オペレーターの配置が必要となります。また、編集方法や手順も、目のみえない参加者が作業に付いていけるよう、目のみえないスタッフの皆さんの意見もいただきながら、直前まで入念な検討を重ねていきました。

さらに、参加者の中には、2名のきこえない方（聴覚障害のみ）もいました。支障なく参加できるようにプログラムをアレンジできないかと頭を悩ませましたが、結局、手話通訳と要約筆記という特別なサポートによって、何とか参加可能な環境を設定することができました。ワークショップ後には、吹き出し型の字幕アニメーション動画を

作成し、きこえない人も使えるよう、動画付き音声ガイドとすることにしました。

さて、今回の企画名「井戸端鑑賞」は、気軽に参加してもらえるように、井戸端会議をもじったオリジナルの名称です。その名称の提案者であり、目のみえないスタッフの難波創太さんが、ワークショップ当日、「色々な人が、色々な角度から、言葉で作品にスポットを当ててくれるんです。」と語っていたのが印象的でした。

作品を囲む人が変わると言葉のスポットも変わり、そのたびに異なる「作品像」が浮かび上がる。こうして考えると、「井戸端鑑賞」は、気楽な井戸端の雑談に留まらず、気がつけば井戸の中に何か面白いものを見つけ、夢中になって皆で覗き込みながら、言葉のスポットを当てて、想像豊かに語り合っている。そんなイメージにも思えてきます。

結局、みえる人とみえない人に限らず、誰かと一緒に美術を鑑賞することの魅力とは、互いの方見方を伝え合って、作品像を描くことのできる自由さ、なのではないでしょうか。参加者が制作した6種類の音声ガイドも、各チームが描いた作品像が、実によく伝わるものになったと思います。

また、今回のワークショップは、美術館におけるアクセスプログラムの取り組みとも言えます。美術館のアクセスプログラムとは、視覚に障害のある人をはじめ、美術館に縁遠いと思われがちな、しかし、美術館を利用する可能性のある全ての人を対象に行われるプログラムを指します。障害の有無にかかわらず、「美術館が、何だか面白そうなことやっているな」と気軽に参加でき、そして、様々な対象者が、互いの垣根を飛び越えて共に活動できる、「面白い」アクセスプログラムを、今後も追求していきたいと思っています。



### 話し言葉の豊かさ

林 建太  
視覚障害者をつくる  
美術鑑賞ワークショップ 代表

東京都現代美術館の教育普及係の池尻さんから「美術館主催のワークショップを一緒に考えませんか」と声をかけていただいたのが去年の8月頃。見える人と見えない人が一緒に鑑賞し音声ガイドについて考えるワークショップが面白そうだと話した気がします。最初に私がイメージしたのは「視覚障害者が美術館に来るための実用的な音声ガイドをつくる」というものでした。それ自体は何ら間違っていないと思いますが、自分自身の思いや「すべき」という義務感が見え隠れしてワークショップとしては堅苦しいかなという気がしていました。ワークショップのタイトルも決まらずウンウン唸っていた頃に、紙の端っこに書いて忘れていた「井戸端鑑賞」という力の抜けたタイトルを見た美術館の方々が「これがいい！」と面白がってくれました。障害者も含めた誰もが面白いと思う場をつくるという当たり前のことから考えれば良かったのだ、と肩の力が抜ける思いがしました。いざタイトルが決まってからは、参加者同士の雑談が自分たちの手で生き生きとした音声ガイドになっていく、そんなイメージが浮かび、そこからようやく「実用性」や「目的」は参加者自身が見出すのだという、このプログラムの方向性が見えてきました。

井戸端鑑賞では「見える人」「見えない人」「聞こえない人」が一緒に鑑賞するので、双方向の会話が大切です。最初に参加者に伝えたのは「見えているものと見えていないものを言葉にしてみてください」ということ。見えるものとは、作品の形状や大きさ、モチーフ、など目の前に見えているものです。見えないものというのは参加者が抱いた印象や感情、思い描いたイメージなどです。鑑賞中、ちょっとしたつぶやきや共感と呼ぶ様子、言葉にならない沈黙や間など、話し言葉ならではの面白さや難しさが随所にみられました。音声の編集段階で参加者の皆さんが大事にしたのはこのライブ感や言葉にならない部分でした。出来上

がったオリジナル音声ガイドはいわゆる音声ガイドに比べて実用性は低いかもしれませんが。しかしそこには自分たちが何を価値とするのかという意志や、自由気ままな物の見方など、6チームそれぞれが感じた楽しさが溢れていました。結果的には視聴覚障害者のみならず、聴く人の想像が広がるユニークな情報が詰まったものになったと思います。参加者の皆さんの豊かな話し言葉を聴くことは「見える」と「見えない」、「言葉」と「言葉にできないもの」の間に広がる無数のグラデーションをみるようでした。

今回のワークショップでは「見える人」「見えない人」「聞こえない人」様々な属性を持った方がおり、同じテーブルについて気軽に会話を交わすためにはある程度の準備や工夫が必要でした。美術館へ行くための誘導、リアルタイムの会話をするための手話、iphoneのアプリやパソコンによる要約筆記などです。場所や情報にアクセスする方法はそれぞれの障害に応じた方法があります。しかしそこから先、美術館で何を感じるかは属性に関わらず自由なのだと思います。何を見るのかは属性で括られるものではなくきっと一人一人が自分で見出ししていくものなのでしょう。美術館に新たな視点や言葉を持ち込むことで、たくさんの楽しみ方が生まれるのだと思います。これからも行く先で居合わせた人たちとともに新たな楽しみを見出していきたく思います。



## ワークショップ企画・指導

### 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

視覚障害者と  
つくる  
美術鑑賞  
ワークショップ

障害の有無にかかわらず、多様な背景を持つ人が集まり、ことばを交わしながら一緒に美術を鑑賞するワークショップグループ。「みえる」「みえない」という様々な見方を持つ人同士が一緒になって新たな鑑賞の楽しみ方をつくることを目的とします。

都内近郊の美術館などを中心に、鑑賞ワークショップを定期開催しています。

公式 Facebook ページ：<http://www.facebook.com/kanshows>

公式ブログ：<http://kansho-ws.jugem.jp>

### ワークショップデータ

東京都現代美術館 春のワークショップ 2014

みえる人とみえない人の「井戸端鑑賞」—オリジナル音声ガイドをつくろう！

実施日時	2014年3月1日(土)、2日(日)《同内容で2回開催》 各日 10:30～16:30
参加人数	3月1日 22名(うち介助者2名)、3月2日 18名
記録展示	2014年3月15日(土)～30日(日) 於：館内ホワイエ
企画・指導	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ 林 建太(代表)、鄭 晶晶、大川和彦、難波創太、木下路徳
美術館スタッフ	池尻豪介(企画担当)、郷 泰典、岡本純子、大平友希子(インターン)、 今飯田佳代子(インターン)、西岡 梢(アルバイト)
要約筆記・手話通訳	岡本夕生、真下弥生
写真撮影	中島祐輔
動画撮影・編集	鈴木啓介
音声編集オペレーター	長尾憲一
イラスト・デザイン	進士 遙

東京都現代美術館 春のワークショップ 2014 記録集

みえる人とみえない人の「井戸端鑑賞」—オリジナル音声ガイドをつくろう！

編集	林 建太、鄭 晶晶、池尻豪介
イラスト・デザイン	進士 遙
写真	中島祐輔
発行日	2014年3月15日
発行者	東京都現代美術館 〒135-0022 東京都江東区三好 4-1-1

© 2014 東京都現代美術館 無断転載禁止

**MOT**  
MUSEUM CONTEMPORARY TOKYO  
OF  
ART  
東京都現代美術館

